

### 3. 若年性認知症と初期認知症の人へのアートワークの効果

平井美穂

#### 【目的】

アートワークとは絵画的技法を用い、サポートの工夫により認知症の人でも、満足度の高い作品作りを楽しむことができる活動であり、NPO 法人認知症の人とみんなのサポートセンターで、2007年から実施し若年性認知症や初期認知症の人が意欲的に取り組める活動であった。制作中の本人にとっての「困難さ」の発見（例えば空間失認など）、サポートの工夫は、生活支援にも役立てることができていた。

しかし、NPO 法人でアートワークに参加することで、他の介護保険サービスなどを利用できるようになる人がいる反面、介護保険サービスの利用にいたらないケースもあり、かみやま倶楽部の開設をきっかけに、かみやま倶楽部でもアートワークを実施し、介護保険サービス利用に結びつくように支援を行った。

#### 【方法】

制作は、モチーフから思い浮かぶことについて話し合うことから始まる。完成後は互いの作品を鑑賞し、自分の思いについて語る。作者の思いを参加者全員で共有することで、本人同士の交流が図られ、自己肯定感が持てるようになり、自信の回復につながることを期待される。この活動を、デイサービスにて月1回実施した。活動の内容は、表3に示す。

表3 活動の概要

日程	モチーフ、ねらい	参加人数
8月8日	熱帯魚 ・アクリル絵の具のにじみやぼかしを楽しむ ・ラメ色の組み合わせを楽しむ	本人5名、サポーター5名、
9月5日	月夜 ・墨と金粉がつくる幻想的な動きを楽しむ	本人5名、サポーター5名、
10月3日	コスモス ・アクリル絵の具の重ね塗りを楽しむ ・スタンプのタッチを楽しむ	本人7名、サポーター7名、
11月14日	秋の木立 ・絵具の流れが作り出す偶然の線と、色のにじみを楽しむ	本人6名、サポーター6名、
12月5日	クリスマスツリー ・スタンプ、ラメ色、スパンコールなどを使い、華やかな装飾を楽しむ。 ・マスクングの効果を楽しむ。	本人8名、サポーター7名、

1月9日	富士山。 ・水彩絵の具のにじみによる偶然の色合いを楽しむ ・和紙の風合いを楽しむ	本人10名、サポーター7名、
2月6日	かぶ ・オイルパステルと水彩絵の具によるハッチングの効果を楽しむ。 ・葉や実の形づくりを楽しむ	本人11名、サポーター8名、
3月6日	桃の花 ・絵具の流れが作り出す偶然の線を楽しむ ・スタンプ、ちぎり絵を楽しむ	本人9名、サポーター8名、

## (2) 事例

Aさん 男性 58歳 前頭側頭型認知症 進行性非流暢性失語

アートワーク初回の参加より、特に抵抗なく参加される。説明を十分に聞かず、すぐに道具に手を伸ばし作業を始め、上手く描けなかったり、手に持っているものを離さず、次の作業に入ろうさせられたりすることが見られた。そのため、サポーターが、目の前で道具の使い方、工程の実演を見せてみると、説明の内容を理解され、失敗なく作業できるようになった。みかんを描きながら「15個描きたくなった」「15個つなげなくなつた」など、自分の描きたいことを言葉に出されることもある。また、好みの色、描き方などがはっきりしており、混色、色を重ねることなどは好まれず、単色で仕上げることが多い。本人に好みの描き方、色があることが分かったため、モチーフと違う色であったり、技法的な違いがあつたりしても、本人の好みの色や描き方で制作してもらうようにした。感想では「50パーセントの仕上がりだが、(次回は)100パーセントを目指します」など前向きな発言も見られるようになる。また、他の参加者が制作している時、「ここを・・・したほうが・・・」など、言葉に上手く出来ないがアドバイスする姿も見られた。言葉がつかえるようになり、話しにくく、普段は自ら話をしようと思えないことが多いが、モチーフから思い浮かぶことを話したり、作品の感想を話したりすることで、アートワークが本人にとって話をする機会にもなっている。本人より、アートワークを続けたいという言葉があり、継続してアートワークに参加している。

Bさん 55歳 前頭側頭型認知症

脱抑制があり、思った通りに行動されることが多い方である。アートワーク初回参加の時、「歩きに行かないのか(好みの活動)」と数回尋ねることが見られたが、最後まで参加することができた。工程の説明を行うのを見て、すぐに作業にとりかかるが、内容を十分に理解はできておらず、失敗してしまうことが見られる。サポーターが、もう一度説明するのでこのようにして欲しいと目の前で実演すると「ああ、そうか。そうするのか」と説明を受け入れ、同じように描くことができる。描き方はシンプルで、こだわりを持って描いていないように見えるが、クリスマスツリーを描いて

いる時、マニキュアでラメ色をつける作業をされないでいるので、「何故マニキュアを使わないのか」と尋ねると「乾きにくくて、持って帰りにくいから使わない」ときちんと理由を述べられる。色についてもこだわりがないように見えるが、アートワークについて尋ねたとき「好きな色を使えるから好き」などと答え、好みの色を使っていることが分かる。色の混色、重ね塗りなどをあまりせず、色を分けて塗るなど特徴的な表現をされるが、「説明を理解できていない」、「考えていない」わけではなく、好みの色や表現方法であることが分かった。また、「姉に作品を見せる」など、本人にとってアートワークが意味のあるものだと感じているような発言も見られた。さらに、疲労感が強く、活動に参加したくない時でも「みんなで〇〇しますが、一緒にしませんか」と声を掛けるとスムーズに参加できることから、仲間で何かを行う「場」の心地よさを感じているのではないかと考える。みんなで一つのモチーフを描き、それぞれの思いを共有できるアートワークも、本人にとって心地よい「場」の一つになっているのではないかとと思われる。

Cさん 男性 63歳 アルツハイマー病

本人は、「好きに自己表現でき、様々な技法で描ける」とアートワークを良く理解されており、毎回、楽しみにしておられる。スケッチをされるなど経験もある。失認、失行があり、パレットに絵の具を出すとき、どこに絵の具を出してよいか分からず、手元が迷われたり、道具が目前にいくつかあると、どれを使えばよいか説明を聞いても選べないことなどが見られる。道具の位置を指で示し、必要な道具だけを目の前に置くなど工夫をすることで、スムーズに道具を使うことができた。また、描いたものを切り取り、別の画面にレイアウトする工程などでは、混乱している様子が見られる。本人も「どうしたらいいかわからない」「悩んでいる」など言葉にされる。しかし、障害からくるやりづらさとは別に、自分のイメージを表現したいという思いも強い方なので、レイアウトする場所を示すだけではなく、本人のイメージすることを聞きながら、どのようにレイアウトしていけばよいかを一緒に考えるサポートを行った。完成したときに「まずまずできました。悩んで、これでよし！と思って仕上げるのがいい、失敗しても、また、次に頑張ります」と実感のこもった言葉を言われる。また、自分が繰り返し経験し、楽しいと思われている技法は（絵の具を流したり、吹いたりする技法）はスムーズに行うことができる。「心地よい」「おもしろい」と感じた技法を繰り返すことで、馴染みの動作になりその技法自体を楽しむことができるのではないかと考える。これらは、本人の病状が進行し、作品が意図したものに完成できなくなっても、本人が「表現することや技法の心地よさ」を楽しみ続けることができる一つの手掛かりになるのではないかと考える。

Dさん 男性 66歳 H21年 大脳皮質基底核変性症

Dさんは、当初、アートワークの参加には「こんな子供じみたことできるか」と抵抗を示していた。妻と参加し制作を行うが、できないことに直面すると不機嫌になり、「もう、帰ろう」と席を立ってしまう。また、小グループでの制作も自分に注目が集まると不機嫌になる様子も見られた。このことから、「自分のできない部分を人に見せることが嫌なのではないか」と推測し、本人が失敗と感じず、制作できるように、促し、出来ない部分はサポーターが「ここは私が一緒にさせて頂いて宜しいでしょうか」と声掛けし、代行するようにすると、「ありがとう」と素直にサポートを受け入れら

れ、サポーターと一緒に制作出来るようになった。また、同じサポーターが毎回サポートし、関係を築くようにした。回を重ねるごとに笑顔も多く見られるようになった。しかし、妻の姿が見えなくなったり、疲れてきたりすると表情が陰しくなり、席を立つことも見られた。そのような前兆が見られてきたら、ソファへ移動して少し休憩を入れてから、再度、席に戻ると最後まで制作を続けることができた。鑑賞会での自分の作品に対する感想も「恥ずかしいです。出来は良いと思います」など肯定的な言葉が聞けるようになった。何が原因で参加できないのか見極め、同じサポーターが継続してサポートすることで、よりいっそう本人の思いなどを知ることができ、本人が安心して活動に参加できることに繋がった。

### (3) デイサービスでアートワークを行うことの意味

- ・繰り返すことで、慣れの活動になり、楽しむことができる方はデイサービスに来るきっかけの一つとなる。
- ・デイサービスの同じスタッフがサポートを繰り返すことで、本人の困難な部分に気づきやすく、サポートの仕方も積み重ねができ、症状別にも対応できるようになると考えられる。また、本人も同じサポーター、サポート経験の積まれたスタッフと一緒に描くことで、呼吸の合ったサポートを受けられるようになると思う。
- ・直接スタッフが関わることで、アートワークでのアセスメントがケアの現場でも活かされやすい。
- ・アートワークの画材の準備などから、本人に参加してもらうことができ、自主的な参加と捉えられやすい。
- ・場所が広いので、NPO で実施していた時よりものびのびできている。

#### 【今後の課題】

- ・参加者が多くなると、サポート、席の配置、参加されない人にどのように過ごしてもらうかなど工夫が必要。
- ・人数が多くなるため、一人一人の思いをグループで共有することが難しく、深く関わるのが難しくなる。
- ・サポーターの養成をどうするか。
- ・本当にアートワークが必要でない人までもが、安易に参加になってしまうことがある。
- ・経費をどのように確保していくか。
- ・業務との兼ね合いをどのように工夫していくか。